源氏

花記

天

千葉龍卜宗匠著

源氏活花記

東雲堂蔵版

桐山堂

活花記序

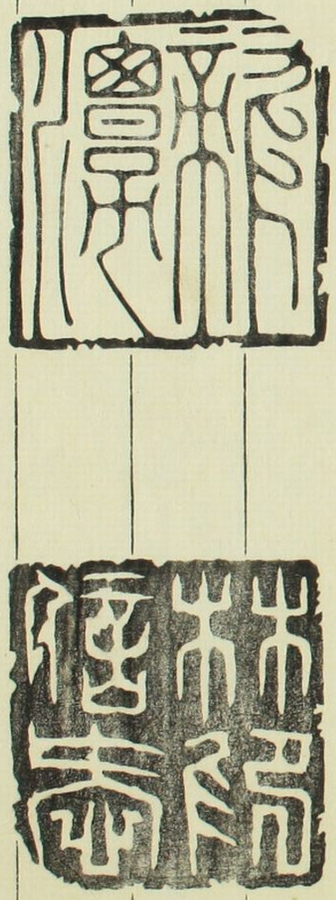
今夫東都之盛。人物之稠。奇才異能之士。衆技也藝之家。愽集如海。誰能端倪極乎。南部千葉龍卜老。亦以椿苓為業。其先汐流。仕東山右府。受

東京都立中央図書館蔵

技于相公云。龍卜之言曰。折挿
之為技也。必順其以活其家保
之精焉。其天全而後之氣流矣。
其能奪造化之巧者。也或少我。
勢輒拳曲。以索美則莫然而
之家家其精離矣。又何異剪

綵矣乎。譬法於食。毛譚綉羅穀
之美。而不知有齏齮之味耳。脆之滋。而少知有大
美玄酒之味。公其來于東部。觀
公之技。著畫一卷。公曰清花
記。雖頗俚淡。然而要人

易解識云。故千載之下
技也。深有味於大美古酒無
哉。偶依張本而讀之于案。
余亦之於古之勳焉。述之所
以作之。以年歲首之尔。
明永之年甲申獨身口



相義之夷祕書監林信圭撰

自叙

夫生花ハ書院第一乃厳よりて貴賤人を移し賓客迎の一ツ乃扱ハ[illegible]ハ月わ[illegible]の地よりハ[illegible]の清浄なるものハ[illegible]及りのゝ[illegible]ゝ先人の心をわ[illegible]ゝを長生の種子凡百茎に[illegible]を越ゝ[illegible]天竺よりハ世尊大象ふ[illegible]を指[illegible]を汚ハ迦葉獨破顔微笑して悟乃助ことゝ又双林の荘厳を移し寺院の二具足も真の仏ハしてむを第一乃向とす震旦よりハ孔孟乃元亨法に

演ぶる陶淵明は東籬の菊を愛して、新蒲を引裂周茂
叔は蓮を愛して君子に仕志ゐめやうなり李唐より世人
牡丹を花王と賞して荘子は夏の蝶となりて百年の
むなしき夢を忘れ紅塵の外に神仙の業を学ぶ昔は
この花園那媛の号あり雲居を望て書を献ず
逆蟯かに神といさめ公は竹を又管仲の称
を楯は瓶に花を献めをべく神院神詠神

むかしの事河は清き王仁は難波津の文を梅の
あしへて法聖武天皇は三笠山の八重桜をめぐりそまひ
奈良の京へ参りくるしの人は阿弥陀の着くに法の
世を楫を繰て日本の業といふなりをしへ地下に
ふくるを新人ふかれ為は雲ハむを拾ひ木の葉
幕を見て上の彩筆を尊ぶ新代の勲功なるべし紙筆
ぐさい字序は発其花詞林と書あるをむえて言に
春でかれくるまの花ゆへ拾る身をぐ情ゆゑにはをさく

花よりあらぬ白浪乃心もやうく花多の嫁優艶の
うゝひゝ芸妓花輝の名ゆゑ恋怒愛楽よゝ
人乃心と云ゝ代くの撰集物語より著明なる今ゝ
妻子よをづゝ芸あゝ源氏小花乃妻あゝ見とかで
ゆゑで筆と家にいゝまゝのゝゞ拾花道八往昔すゝ
あるといゝゞ法をゝ式もゝく只云んゝてゝ乃
友者と眺めるゞゝなゝ之後
室町将軍源義政公　市代泰平乃時ゝ八家儀

ゝん法式と改中よゝ也ゝ八書院生一乃粧として康正
年中源氏の花瓶と拵めゝひ而后文明乃頃小山
の東求堂へ引移せひ市薙髪ゝて
慈照院喜山道慶と申段名世ゝ見と称して　能阿弥
東山殿と申ゝ　能阿弥
お阿弥お と名具ゝ茶書ゝ家ゝ歌ゝ之芸席乃
花を叶時ゝ用ひぬ千家流石列流室列流ゝ
ゞゝ八皆舎席乃ゝ乃ゝ出ゝ今世ゝ八ゝ業義
拠入見ゝ名花道八子孫ゝ伝承ゝ也ゝ教ゝ

ゆへ知る人帯なり茶乃古流もをぬく　松山桐公の
活秘義乃蹈絵の然れ珠光より伝来して外書法
流して今に南紀古門たつが家よ残るばかりにて流布
せざるバ知る人少し　生花も古実事院数寄屋流法もあり両一妙まつ
茶道八弗以紹鷗利休等どもしゝめ石列家を乃家ち
弘まるも会席茶室乃ごとく遂に九牛が一毛なり
書院の法式よかゝるもゝ抛入と指くむと活るすを者
〳〵て寂寥をのて縁よりへ死活を矣へば教わやゆる人

多し故よ世乃人立花にハ法式ありて活花ハ法をなく
式なりとおもへるを活花ハ立花より古紀事なるを
かどう作法なるゝんや法式なるをバ礼なし書院を
五常乃礼と云しなる席かれど活花と唱へて心城
賞し四花四季見切見張し縁乃切なるかどいふを去を
むの人中なるを真行草の礼なるを花器ふまを行草の
品あり表位を位乃心形と和ぐし心器清く花清く
清記あるを稜しして容疎なるを嫌べし勿論を露方

毘乃壽多る所よハ女流男流の對乃姿なるもも松竹梅
のいけ方秘伝多く出流乃もよハ度うぎうふ伝有つ私の
姿なるよハ生弁入紅海弁支の七魏又芸の風流七夕の姿く
そ口伝多し源氏乃もハ別伝ありて桐蟲箒木と始め
八十口魏乃活方類人（葉花なるもハ印可免許なる
て幼なべ立花も生姿も元同根なりと之ぐも立花を
巧と表し節真に如こ活もハかりうまもと捨なる
瓢と拾ひ清水を汲く野童の苅拾なる姿をいうすふ

元所生前よ面さまりて山に池水あり流谷よ大木ありて
古記井乃葦に成腔中乃あの姿と分て流れ松
の高根小溜まり前あり且の約魏ようむ蔓あり凡そ
変万花根茎枝條葉花菓乃七変いけ方をえいづれと
拾んや元海情を凡そ樂まんよ一本一草もむるうう
ず只祝乃ことをもとふ答し立花ハむとあてと唱へ
生花ハ姿といきるし唱小立花よハ真小心見越添受流
前五ふの七乃乃具を調へ立腔中腔下腔乃差別あり

あとつぐ位官正しく筋松扇をはらくまぶ樓より立ち
烏帽子を垂宿より袈をかけ一生をるこはあも
ども無日乃用ひて僧侶の数よりしばしむ八食薬
をとうしび日くより新よりて志ら能法を尽るの子竊
よ世之の活むをとうしるとふぎ紀宝暦七年乃春三月九日蒙法楊
勅許ありしに日八ゆ家ふ家代くそるむ小晨の条日
ふれ八昂日洛東根岡慈題寺て行ぐ行る
嵯山相公市岡扉の杉苔る像乃霊前へ生むを後へ
うやくしをも

樗裏

三御所様ゆ一條前関白左大臣道香公へ生花の花瓶八松竹梅
愛親卿の仰よ依て繪所預正五位下中山孔中将
前左京之進藤原朝臣土佐光芳ゆ拠て画図を奉獻松竹梅八六種の秘事
百花瓶とも世に不載
を後紅波津よおのくの好人を集て道を伝ふ
とりひけどは初　柳営の廊下院さは一乃を仏伝に
我よ枕く志をとらぶ少る多く類よ先師の徳を感ド二
百余年をふるの立帰ふ中興すべき乃時
を待るべしとたはきふく浅沢乃のあさ紀人ら流布

で道路をよろこぶ人あるべきもとより志を慎に下為
もろる茅打乃今八穂よ出蘇の藝況るしてあらの
山の雲とのこ咲出るもの数こ門人あまたれがいきるを自
画に写して見せよ伽ふこいぐるを乃切見源しを奥深
活方写にく及ぶこ程山乃志のあらん人くハなるく
弱をのしのふべし我七情をいとしつみこを形を永さん
天地よりこるめる稚く一こして活ばざるこいふるかこん其
いきるふ節ぬこいふすを味泉長ふして強波乃浦のす

あをもこるぬ緒さ筆を家て藻塩草書ひつめくもむと
がふ主人義ぐことるづふを巻を述るこしるり

明和元甲申冬至日

松花斎法橋 千葉龍卜述

九例　附或問

或人問曰我幼冊より花にぬて流流の傳を学あむと
数ヶ年多年ありて家流石列流を列流かゞいふ
も暗中比の事ふしぎ共茶席のもたらありて書
院の活花法式別ぐ又生花ハ立華より出るりの
といふ人有し少人立花ハつゝ入ゝ傳を学ぶ立むハ
石版の仮法ゆ生ハ生むの家にあゝ比べ立へ花
むさびやしとぐうゝ中傳りて今世生むかん石実
と伝へしとゆを家比を比子茶家道の源氏活む

〻〻傳授せ〻ハいつゝ古実又伝のゝ傳来せる事ハや子答曰源氏活花といふのハ往昔室町將軍源義政公政事乃暇日花を愛ゆゑ孫活ひ康正二年丙子初冬之日別芦浦寺場文阿弥花世を集阿弥京珠光文坊徳大寺義門大日廣東六人を命じて入十口帖乃花論と格花傳授し奉り源く秘〻〻宝義之術のひぬ源氏乃芸法ハ花生もの古流なり入十口帖の活方源秘の巻六種の器式活方義君別〻て口秘義あ〻て口宝義を収〻て世に

知人希なり中に珠光文坊花道活能なる由六種の秘事乃口訣の巻乃花義〻も論の巻〻有紙下〻活る支を代〻花傳源秘子が家之傳宝義〻〻云めと〻〻のなりもの入いきゝ傳授のゝハ子先祖行嵐初珠光文坊門弟後東山殿御亜身世由緒花傳名義ハ有〻る源氏流生もと号ゝるなり源氏五十口器の内義義ハ〻〻数五〻〻

活花記　上巻

市幸花義不忘つとふ名也

澪標花之

相國寺ニ有

六条家ニ有

舞大もの

夜の裏紫色

東屋花色

夕霧巻

同　花　壹　梅の盆くふ名図

宴屋　紫色　横笛掛板絵合宗壹

右八張宴並照寺殘

紅紫賀花色

桐壹　箒木

一条家　有

子家　有

清水寺　有

張岡　有

茶田家　有

子家　伺

同

その外乃花色八ゑ不ばゝ

源氏金沢色法八張技乃人よりくんで板おのゝ

山書ふ著ゝ家八出院七不粧ゝ云席ふ乃も形ハ

初んゝあに出ゝ源氏の考ゝ乃も形ハ称ゆるが有よ

一向色形ゝてゆ富よを出さゞ源氏活もの真実八巻文老

十八癸丑年十一月十八日示ま

台命ゝて紅列の義卿小東山の也編紅陽乃家よ

有べゝと作あゝゝ源氏又十四帖の色編深秘ん

書に私考と加へ贈進あゝしゝ

江陽五家の日記と集一書明暦二年改板に源氏艶と云ふ此全紙二十卷有り
十八卷目の後より茶論に所望のゆゑ太に源氏艶と云ふ編六人の連歌の内
太に廣未とくぶ花池坊泉能線能八博意とゆふ也入れり池坊八源氏茶論の意
ふあり池おゝして茶卿の家より有し花編の去八大に廣まれり但茶ハ大に氏と
くぶ花く池坊専能と書しゆゑ茶ハ
倭漢三才圖會より六角堂頂法寺の事と書し中に坊舎五坊の内池坊の事
出たり之花は但の事八東山に阿弥朋専意最古く天文五年正月十七日著花
傳授池坊後其家系善之累世以専字為名中興有専好者堪能定法式家
小巻物大巻物及秘傳抄撰あり源氏活茶の花編八康正二年より立花は但抄八
天文五年より源氏活茶は編より八九八十年も後の事なり之後池坊是と後
ゆゑあり時代もお遠しとゆへ

凡例或問終

源氏活花記上

書院向會席上の活方
付茶花茶の事

扨て花と見るゆ八真行草の後あり書院小座捕ハ差別
もあり之ん坊をあくむ茶乃側をくゆ中と見る事八茶
非花なり亭主方ハ客應の茶ゆもとゝんぼうして
見あくかゝべし見中り撰投よてもむにん坊のゆとしゝとゝ
之席よて別ゆ之の巻かし能くゝ乃ゆ入くゆ茶無知
座し亭主の方より八花之のむゆもバ附作の茶活中り
あゝ之習あくて八活ざるゆゝゝ先むをいきんと思ハゞ活
花乃出生と見分て活るゆ肝要あり万ゆ事ゆに茶生

じて紫咲ものうるはしく紫多きわくきふが出生多りたまく
むすび咲初るをあるいとぐも又接ぶ多り花こうんすりて
一ぶんハたがく一ぶんハ中ゆ〳〵紀満宗と働有べしむ紫こまた
表裏も有べし出生を初〳〵ざれど花弁多て素かし故にむ
形当式の始よりふよて出生を孤やしにんと分てこんこうこ
余り風情を分てあめゆゑあてハ風情あまゝぐも死むふる
るものあるを侍よてハ芸様あ〳〵てえにくし様を云いうよを
清らふ出生を背うぬらてむるん〳〵ぬ〳〵る本絨乃まハ垂るる
ぶ市生るふ余り曲くゆるハ病るり垂こて勅あ紀をのハ

むるゆゑ〳〵ゆゑ死ぬあり長短もあり風情も有こて活ぬ也
ゑるハ皮ハざるふ〳〵中乃を能ゑ紀まへて活べきあり歳の
まゝよてハ花形ゑぐりぐゑ〳〵くして汐義もあり人も義ざれ
ど立常乃道も矣初〳〵んやを天竺とむゑ義くい市ぬるハば
出生を背うぐゑて一瓶乃内ゑ表秋ん越あ〳〵ん瓦瓶ふむを活
るハ往昔欽明天皇の御宇異也〳〵瓶を縮ゑ〳〵ため〳〵の
花瓶を二瓶二瓶とふも世謂ゑ〳〵むるハ往昔の酒器ゑ〳〵ゑふ
るゑ乃字を出今世ゑゑ用るむ器ハ紹鷗利休侘茶ゑ家の宗匠の
始む不〳〵ゑ程〳〵乃花ゑるゑ出来ゑるゑ〳〵右のむるハ世ふ弗也

玄席のかれむ器ぐらう多く紙子お実書院向ぐゑム
めよう大さある右器ふも出〻〻出花のむハ抗義才一う
て緋ふ富貴よ粧ゑ〻〻ふ花清く花清く みも濂
清浄ゆ〻〻むゑ家乃粧好むるも器もお慈ゑるゑ用ゆ花
ハ花器よお慈ゑうべ〻富貴乃むしいふハ器沢山ゑるゑ富た
お紙ゑ際ゑ校器ふむのてゑ〻奇の舞なるゑ貴の姿ふて
富貴乃むゑう緋ふ沢山ゑるゑ宜〻〻〻粧よ多く清ゑハ富
ぐゑふ〻〻きゑゆ人ゑ富〻〻てゑゑ〻ぐ志の粧〻ぬ
〻て富貴というべゑゑ老紙〻ゑて富貴乃人ハ帯器む

出ふ叶〻ぐ自然と勢ゑ〻〻悠貴よ老く潔す出流の
むゑ家ゑぐゑゑゑべむ祇の義肝要ゑう風流て余う
校紫の屈曲ゑゑハ生むのな云に叶ぐ〻お生と才一をする
むハ兵五ゆ〻〻正風祢ゑお〻ゑ〻ふをゑる校義乃中に
自然と風情ゆてゑ強よゑ〻〻紙ゑをつふゑ緑ゑう
余う亜ゑ〻〻〻風情ゑゑを出ゑ不なす出流家ゑぶゑの
むよハゑ河義の正花を用む抗義よゑゑ出〻乃器に
云う畑ゆう示む〻〻〻平生たゆ〻〻ふむをいゑる河ハ方む
万器と用ゑ又器云〻て流むを集て数ゑ〻紙ハ云量ゑる

むを云なり如法経なりて実相あり花菓枝葉も
実風なるもなりなどと仏ハ云量ふりなるもおなじと肯
ぶるゆ行業ありたとへ抛入と雖く云とても生
肯て八抛入るあらばなぜ中かく二念とけなど活るなむ
の功義まらまるべむ一中なるあを入くと号てなどなく
なるすゆへくを第一ともあり活念乃抛ふいまごゝに
人の事なり むの本生を知ゝなどして死活も無ざれ念
あらだ小量なてる活べしさりと習よも及ぶべゝなど又む
乃おまふまるずしてんのむを活るとゝてなぜ中死すを

見とんなるゝ八云席 柔席のむ牛を乃変して出流のゆ
を知ゝなど自己のゝ皆るべしんのむを活るとゝ公式一
仏亦ゝ衣裳 二念を加など念を出生ふ肯ざるゆゝ如も
立理ゝ活るとて伝ふんゝ出るむの器あるべしむ仏の
無ゝを云形なゝ日ゝのもバ一流の内よも絡ゝ乃ぬむ
不乃もなるゝ形るゝものあり利休茶の宗匠も皆東
山の古云をもりてそうへ自分の好む亦を活るもしあた
るへていで釈迦の教法も八宗九宗ゝ祖師乃好む不も
法宗紀もゝ禁乃万水よ浮む新も岸よ乎りて流もバ

月光一輪のごとく万物の出生乃理ハ一つの霊蒙も知
る天地人乃三才大極と云陰陽五行ハ配当して無不
ちらへ理学として理屈ハ落く必業にうとく紀ものの
たとへ醫師の学力ありけても療治不功者なるも有ぶし
或ハ清るハ乃ゑりて天と為り濁ハ地となるとく白き気ハ
上と赤きハ下として花ハ上と咲ふる気ハ東へ咲ひ
西へ咲ふるハ西と出生とん為る人もあり陰陽の気を陽
ようひ陰気ふあるざるを陰に当ひ又ハ乃むとて
西方へ引法せるく当ふ見指偏屈ふるう当ふ天地の名

よまる有情非情ともに法陽乃気を稟て生るもの在一
一業乃中ハ自然と陰陽他生を出生を肖ざ者ふ
で定量乃為あり天地法なるんむふ寸法と極ふ
と下の気別有ふるもの或ハ気気の人ハ意一寸
法を極ぶ云ふ気ぶ法むハ斤執なり只花ふ
当にう家乃拵好ハ
ふハ仏者の心働ふるべ欲いへどとく猥藉ハやハこ
ハあるべきず大概定ふ一ふけ三ふけハくも病し
むにうるべし　予が工夫亜於所

命月永ふといふむ気ハ

計すべうりあるとも莞爾かどんつく育あるハこれ人を
立つかづくせゆるふ活くまも一きるあ源あるハ生ていえ
ゑ抜ぬ方ハ小座敷又ハ四畳こ畳乃席より大広間
む茶ハ用ひづく大書院の茶茶と二畳こ畳の席より畳
あ敷せと茶ハ濃くに弘乃を抜ぬあるふ同一流より
てむと第一乃作ともるハむハ活花するが為出生を正一形と
粧が祝義なるむ形も古法乃通り約束を礼さず活が礼也
於て家うぎハ法或ありてむぐう法なくてハけうたく人
茶席茶席くるも出生どうまるに茶形とらぐ〜て第居

應よハ教ぐく活花を第一ともるふ活うさを知ざれぐてとぐを
記むふるなり不寝無不祝義あり活方を修仕るハ
とのづく学まいれくくて滅よせぐるぐく小座敷
茶席ハ乃約席よいもるむハ茶どめるくくも自由にむ茶
教をのなり茶人の作茶より出不生あるく約席より活茶
所ハ活方別に習あり出院風つよ記不かぐるむと五所ハ
茶茶茶ハ花茶花むと串ハと生くふハ
習何く花茶に生くを入くむをさるるハ活茶よてハ世勢
ななり活花ハ乃中まで生くふ教し見生ゆ活る

とすることなほゝしき約無の器よりはむどめよりも及ばざる花
枝打ちけてもなほ活器にたむどめハ立ものさんはなるハ抛入れて
器へく出院向の事と知るべきなるもむどめも初人の所
化ハ器乃無し文ハ孫ばかりてむ妹の人ハむ留も出の葉
なるべし立義物朋塚ハ風あるてもむ形くずれど見苦
てを沢世と小活花と称し一名砂地折ふどふ板色を入砂利を
賞いきるもあり見ハ正しく立義砂地の中し一名活器の
作法より叶ぶ活器茶花立義砂地朋塚と名て作法をなる
絡ハしうざるやうふん抛ものあり立むる器乃形量数

と用ゆ花器落板ともむよ変して用ゆるあり立花器ハ立
乃器器よて出院第一の粧あり越花器も形量あり金抛
網鉄竹木陶器貝類よてもゆ化あり竹乃器器ハ一重切二重
三重入重まてあり三の竹筒と竹筒と月筒と月切ざるやう
肝要あり素むる竹筒と共通しいきるを縮柳像しる古
事あるゝ伝授さるこの通ものを実よハる皆を作乃
作法あり伝作さるよゝ花器の形打ハ古安あり
器器乃形打形を之ゝ花器の打よあゝ戦国乃間名居
る軍用にあるる打ゝ一と活世よなるゝも袋ふ

網引し海の底ばかりなる乃打よ亟し用ひらるゝ故よ寸法に
依りむの活方よも習あり打乃打不寸法ぞうを知り
てもけ方実ともゝざれば乃活方分るまゝ仍て是花
芸乃打打八出流よ打ものよあゝ居冨小産業八極打
ものあり紅乃むゝ芸八河芸時刻を渡いもるものありと雲く
芸へるありこれを出しとるふ舟八芸乃未より夏秋の
初まて用也一日のうちよも四刻あり約よ日写まて出舟
写ちよ八まて入舟七ツより泊舟とん板いもるが習あり之出
り舟り偏屋ある義へり是も方実よ一向方紀事迄

舟乃むゝ芸八海門亟紅よたゝるものふ也ゝ四季乃分を
時刻ゝ分もあり東西南北小風よ吹ひ従来もるものあり
逆風方迄八約よても益に成くも泊舟とる出入まへ
舟乃芸八ものあり乃ふくにより出舟入紅泊舟ゝ和の紅方有
何迄も生方習あり舟り理屈ゝ乃都ゝ風雅乃ふ
うゝ舟のむゝ芸も拵好よりゝ量方紅と用也約弦も
網絲連も拵好ゝ有り約親入八舟とハ又拵ゝ方ゝ是を
量方ある紅あり約親も方ゝありゝ拵約親八寸法あり
何よても好にあるべし猟も約弦も好法有櫂縄方級

また〻絢ゆること下の別あり京〇絢組ゆるさまざま背
一ッ絢親須よりも作にくを絢たる絢ゆる背至絢親も無う
活ゆる習あり是で知るべし也〻舟の浪〻ず活方法
祝義武法表巻切紙伝あり後の図案を記し至る皆委
東山　源君の親組を来し絢ゆるを中絶しれば
知る人をも〻永伝のむを活法よりは古法紋組まかるす
あるとさとる人の意さハたあり曲流の業ハたを活ハ
今〻厨のあるべ寝を芸うをバんの軽毀なく見非といを
ど自賛毀他を大よいもめのあり必我言を存べるど

後世むの製或さる物ん乃為に古実乃一巻を初り記
書院向小座浦乃花瓶を家むホに如まゝ後の自画
と絢〻花形を号し初学乃一助とるあらんと世の
及ばとそのなり

源氏巻面六帖源秘

○紅葉賀　○若紫　○末摘花
○須磨　○明石　○蓬生
○雲隠　○東屋

表之巻箇条

○花散里負の事　○紅葉賀の事　○葵の事
○十文字乃切れ　○長髄の事
○久切美同色の事　○乱紫源副ざれ
○菖蒲杜美乃れ紫老乃事　○向枝変枝向乱の事
○角口乱美耳口美るの事　○卓下乱美乃事　香炉
○美美水打と不打との事　○落板家家れ
○草花れ乃事　○廻美の事
○客乱生い美乱乱と乱陽の事　○表乱入仕美切乃事

○あむ生迎仏宅の事
○生花の花納る事
○色絵に色乃絵ふの事
○あ位色位の事
○放義小畑ふ色乃事
○花切時の事
○萱草一八乃むの事
○佛前の花乃事
○延寿中陰の色の事
○回賞敬のむ乃事
○あ乃むム根作法の事
○男女赤白の事
○入色白のむ乃事
○産婦へ不出むの事
○家咲色切根乃事
○神前乃むの事
○接待の事
○花とむ入の縁へり乃事

○二重切よてあへむ不生乃事
○出陳祝儀ハ旅立帰ふむの事
○舟入和泊舟の事
○篭むの色の事
○落板変根の事
○古家花色仏拾乃事
○志仏事の事
○産婦に寄生根の事
○二重切生根乃事
○一重切色の事
○物むの事
○須寸法の事
○細口色ゆむ事
○古桶むム入汗の事
○むの色打乃事
○弱物陸地横ゆ寄る事
○庭の接根ゆ寄生根の事
○三重切活根の事

○人参切いもあるの事

以上

右八十四箇条一年かぐ郷者右四季の定出生を
るもおの〳〵挑んの人〳〵よハたゞ条一書にして伝授せ
しむるなり

○茶屋一ぢ生花のの

切紙傳授箇条

○大業を毎月の別仕六ぶの事
○一花一紫の事
○菊一種の事
○杜若奥の原沢のの
○毎月の色の事
○名月のもの事
○紫舟のの
○逆松の事
○大紫白季の色分の事
○秋海棠のの
○杜若白季色分の事
○月仙の事
○七夕のむれの
○色糸の事
○破損舟の事
○二渡逆舟のの

○二艘の舟の事
○湊入船のこと
○梯の事
○松の事
○菜の事
○貴人より祝儀のむこのこと
○婚礼式對のむこ（但長唐板のこと）
○婚礼盃の冠の事
○持参具足花用初のこと
○二艘の舟（但能の舟と云事）
○一種ものこと
○紫の事
○竹の事
○藥草の事
○婚礼式のむこの事
○婚礼出院之活方の事
○女房男龍の花のこと
○ちゑの七龍飾のこと

○乙姫と花のこと
○二幅對の事
○人幅對の事
○筆のこと
○撥板の事
○七莚のこと
○刀の事
○地下の人大刀さすこと
○乗馬の事
○二幅花のこと
○口幅對のこと
○長帽子の事
○仏巾の事
○花のこと
○提の事
○若刀の事
○大将宗匠將家東刀のこと
○二紫一むの事

○花鏡玄結びの事

以上

右切紙八十四箇条八條煉源志を見在切紙と云く
只授せしむ表八十四ケ条切紙八十四ケ条云あり如
上源氏八十四ケ条有り 総合百六拾二箇条也

書寫 門人 大橋彩哦

源氏活花記上終